

スポーツにおける不祥事報道に関する一考察

— 高校野球の不祥事報道をてがかりにして —

村上 信夫

矢口 彩香

(要旨)

本稿は、高校野球の不祥事を対象とする報道についての考察である。高校野球は国民的行事といわれるだけに、一端、不祥事が起こるとその社会的な影響が大きい。なぜ高校野球だけが特別なのか、それに対し歴史から解き明かすと同時に高野連の中での変化、そして報道分析から考察する。不祥事報道の研究は企業不祥事を対象とした経済報道の側面からの分析、調査が多く、スポーツの分野に関する研究は殆どない。高校野球という一部に焦点を当てたものであるが、スポーツにまつわる不祥事が社会問題となるようになった現在、本稿はスポーツにおける不祥事報道を考える試みに位置付けられる。

はじめに

毎年、大きな盛り上がりを見せる春と夏の高校野球大会。熱戦を繰り広げる高校球児の正々堂々のプレーや爽やかさが喧伝される。しかしその反面、爽やかであるはずの高校球児たちの暴力、喫煙、飲酒などいわゆる“不祥事”は後を絶たない。

それらの不祥事に対し、日本高校野球連盟（以下、高野連と略す）から対外試合禁止などの処分が下される。しかし、同じような不祥事にも関わらずその処分が大きく異なることが多々ある。処分は日本学生野球憲章により謹慎、対外試合禁止、登録抹消・登録資格喪失、除名の4種類、それに注意・嚴重注意がある。しかし、具体的な罰則規定はなく、近年、嚴罰化の傾向にあると高野連の西岡宏堂審議委員長も認めている（毎日, 2013）¹。つまり、処分内容は高野連の裁量次第。それでいながら、報道で「試合禁止」「出場辞退」という文字が踊り、選手にとって最も重い決定が、他の高校スポーツに比べ頻繁に出される傾向にあるのだ。

夏の高校野球大会は、1915（大正4）年、朝日新聞の主催で始まり、春の大会は1924（大正13）年に毎日新聞の主催で始まった。新聞の販促を意図したメディアイベントである。が、

教育の一環（「学生野球憲章」）²と位置づけられ、発展してきた。

高校野球は“たかが”部活にもかかわらず、大会期間中はテレビやラジオで全試合が中継され、さらに予選も地方局、ケーブルテレビの中継や特番、新聞や専門誌などで大々的に報道される。この盛り上がりは他の高校スポーツに類を見ず、高校野球は国民的行事と位置付けられている。

マスメディアがニュースをどう扱うかの判断基準をニュースバリューと呼ぶ。メディアの価値が高いために、高校野球の不祥事報道は、他の高校スポーツに比較し厳しく大きな報道が行われることになる。平野（2010）は、企業不祥事を念頭に不祥事報道のニュースバリューを「影響の大きさ」、「組織関与の度合い」、そして発覚後の「情報開示プロセス上の巧拙」の因数分解だとする。高校野球の場合、死者などの直接的な被害はあまり考えられないが、一度、発覚すれば国民的行事としてその波紋は大きい。さらに野球部全体の関与度合、発覚後の学校の対応でさらに拡大する。

高校野球不祥事とは

ここまで「高校野球の不祥事」という言葉を用いたが、「不祥事」とは定義が定まった用語ではない。不祥事は幅広い社会現象であり、既存研究のアプローチは確定していない。経営学では「コーポレート・ガバナンス」「コンプライアンス」及び「リスク・マネジメント」「C S R（Corporate Social Responsibility）」「経営倫理学」からの研究があり、経済学では経済財としての「情報経済論」、不祥事報道に関する「報道の経済的影響」、社会学では「メディア論」「ジャーナリズム論」、広報学では「危機管理広報」、社会心理学では「組織とリスク」、コミュニケーション学では「リスク・コミュニケーション」「クライシス・コミュニケーション」など多岐に渡っている。もちろん「企業などの社会的な存在が犯す悪事」と言ったイメージは誰もが了解している。が、研究の数だけ定義の幅がある。応用倫理学事典には「不祥事」の定義はなく、「企業不祥事」として次のように記される。

企業不祥事を単純に2つに分類するなら、企業が人に危害を与えた場合と人を不快にさせた場合にわけられる。人に危害を与えた場合の不祥事は、違法であったり、民事や刑事責任が問われたりする。自由主義においては他者への危害を防止する目的で法律が制定されることが多く、他者危害原則（他者危害排除の原則）をおかしているとして大きな不祥事となる。（中略）企業が人を不快にさせることにより問題となる不祥事は、他者危害原則をおかした場合と異なり、明白な違法・不法行為と言い難いが、時と場合によっては大きなスキャンダルになり、マスコミなどに取り上げられることになる。（中谷，08，p340-p341）

ここにおいて不祥事は明白な違法・不法行為と言い難く報道された行為としている。つまり前述イメージにおける「悪事」とは必ずしも犯罪や違法行為だけではなく、不正、不公平、モラルに反するような行為も含み、それら全てが不祥事とされることもあるのだ。

本稿が対象とする高校野球では、過去最多と言われた2005年、高野連は合計960件を“不祥事”として審査した（朝日、2006年5月26日）。その内訳は、指導者の暴力や部員による暴力、いじめがあり、万引きや喫煙、飲酒など違法行為も多い。この年、駒大苫小牧高は夏の甲子園2連覇を達成しながら、部員が飲酒、喫煙で補導されたため不祥事として、翌06年の選抜大会を辞退している。新聞、テレビなどにおいてはいずれも不祥事と報道している。

本稿において扱う「高校野球の不祥事」の定義は、応用倫理学事典に準じ「部員や部長の不正、不当な行為により高校野球部精神に反するもの。必ずしも違法であるものだけではない」とする。高校野球部精神とは、学生野球憲章前文に則る。

日本の学生野球として学生たることの自覚を基礎とし、学生たることを忘れてはわれらの野球は成り立ち得ない。勤勉と規律とはつねにわれらと共にあり、怠惰と放縦とに対しては不断に警戒されなければならない。学生野球としては試合を通じてフェアの精神を体得する事、幸運にもおごらず悲運にも屈せぬ明朗強靱な上位を涵養する事、いかなる艱難をもしのぎうる強健な身体を鍛錬する事、これこそ実にわれらの野球を導く理念でなければならない（高野連、1950）

本稿において、解き明かそうとするのは次の3点である。第1、高校野球において不祥事に対する処分は基準が曖昧であり、恣意的である。そのため同じような不祥事に対しにより異なった処分が下される。最も重い処分「対外試合禁止」「出場辞退」に至る場合とそうでない場合があるのもそのためである。その背景に、第2に“たかが”部活である高校野球が「国民行事」として発展してきたことと、そこで生まれた「正々堂々」「爽やか」なイメージと他のスポーツにない高校野球の特別性が大きく影響している。そして、第3は、国民的行事として高校野球の不祥事は他のスポーツよりニュースバリューが高くなる。さらに「高校野球の不祥事」は処分の基準が曖昧なため、報道は最も重い処分である「対外試合禁止」「出場辞退」に至るまで加熱する。

これらを明らかにするため、本稿は以下の構成とする。まず次の章と第2章では高校野球の歴史と文化的背景に触れる。そもそも新聞社の販促を意図したメディアイベントが「教育の一環」と位置づけられる過程を明らかにする。その過程で「正々堂々」「爽やか」といった高校野球のイメージが生まれ、どう変貌したかについて検証する。第3章は、処分が行われる仕組みと処分の決定、その基準。そして第4章で高校野球の不祥事報道に関し、企業不祥事の報道に関する先行研究を援用して報道の特徴を明らかにする。

本稿は、2012年度、村上研究室の矢口が行った研究が基となっている。矢口が調査・分析を行いまとめたものを、村上が考察と加筆を行った。不祥事報道に関する研究は企業不祥事を対象とした経済報道の側面からの分析、調査が多く、スポーツの分野に関する研究は殆どない。高校野球という一部に焦点を当てたものであるが、体罰、セクハラその他、スポーツにまつわる不祥事が多く報道され社会問題となるようになった現在、本稿はスポーツにおける不祥事報道を考える試みに位置付けられる。

1 高校野球の歴史と背景

1-1 2つの高校野球 全国選抜高等学校野球大会と全国高校野球選手権大会

高校野球の全国大会と言えば、春に行われる選抜高等学校野球大会と、夏に行われる全国高校野球選手権大会の2つが挙げられる。他に国体でも行われているが、公開競技のため本稿の対象としない。前2大会は兵庫県西宮市にある阪神甲子園球場（運営は阪神電鉄）（以後、甲子園と呼ぶ）で行われ、甲子園は“聖地”とされる。

全国選抜高等学校野球大会、通称「センバツ」が行われるのは、例年3月下旬から4月。出場校は、前年の秋季各都道府県大会・地域大会の結果を参考に、選考選抜委員会が決める。地方大会で優勝か準優勝すれば出場確定といわれる。が、高野連の大会要項によれば「校風、品位、技能ともに高校野球にふさわしい学校、野球部を選考する」という選考基準があり、強いだけでは出場できない。不祥事などこの選考基準に抵触し、出場を辞退した高校は19校になる。2001年からはさらに、「21世紀枠」という新たな出場基準が設けられた。21世紀枠には、県で優秀な成績を残しながら出場から遠ざかっている高校で、かつ他校の模範となる高校が選出される。「他校の模範」という基準は、大学への現役合格者数やボランティア活動などが重視されるのだが、この基準が曖昧だという指摘がある。

夏の全国野球選手権大会は通称「夏の高校野球」「甲子園」などと呼ばれ、センバツは前哨戦、夏は3年生は最後の大会、決選とされる。代表は原則として各府県一校、東京都と北海道のみ2地区に分け2校ずつ選出されるため、合計49校が頂点を競う。6月中旬から7月下旬にかけて行われる地方大会で勝ち上がった学校が出場できる。

地方・全国共に「負けたらその場で終わり」というノックアウトトーナメントで行われる。そのため番狂わせや予想外の事が起きやすい。そうした運営形式と、3年生にとって負け＝高校野球生活の終わりとなることから、筋書きのないドラマと称される。

1-2 高校野球の歴史

高校野球は新聞社の経営戦略から始まった。

夏の大会は、1915（大正4）年、大阪朝日新聞社（以後、朝日と呼ぶ）主催「全国中等学

校優勝野球大会」として始まった。拡大軌道にあった朝日はライバル紙と差をつけるための新しい経営戦略として様々なイベントを創出していた。

朝日だけではない、当時、新聞はほぼ唯一のマスメディアであり、購読者を増やすために大衆に受け入れられるニュースに力を入れていた。駅伝やマラソンなどのスポーツイベントや博覧会を開催して自ら記事を作り出すことで購読者を増やしていった。

朝日が野球に目をつけた理由は2つある。1つは外来スポーツである野球が普及期にあり、その先鞭となったのは各地の教育の中心にあった中等学校であったこと。そして、大会の結果は知るには新聞しかなく、郷土の誇りの中学がどう闘い、優勝したかどうか、その情報を他紙に対し独占できるからだ。狙い通り熱狂的な郷土愛に支えられ、朝日は地方で部数を伸ばし人気と知名度をあげる。

その9年後、1924（大正13）年、ライバルである大阪毎日新聞社（以後、毎日と呼ぶ）も野球大会に乗り出した。全国選抜中等学校野球大会を開催したのである。第1回開催は、最も拡販に力を入れていた名古屋で開催された。第2回からは甲子園を会場としている。

甲子園大会開催以前の1907（明治40）年、『万朝報』（25万部）、『報知新聞』（30万部）、『東京朝日新聞』（20万部）、『大阪朝日新聞』（30万部）、『大阪毎日新聞』（27万部）などほぼ横一線だったものが、1938（昭和13）年に『朝日』『毎日』（東京・大坂合計）が共に発行部数100万部を突破し、他を圧倒した。もちろん部数の伸びをこれのみに起因することはできない。しかし、中学野球大会を持った2紙のみが伸びたことは象徴的である。

放送メディアの参加は、1925（大正14）年ラジオ放送が日本で始めると、その2年後、1927（昭和2）年夏（第13回）、実況放送が始まった。これが日本初のスポーツの実況中継である。

第二次世界大戦後、学制改革が実施され、大会の名称は中等学校優勝野球大会から全国高校野球選手権大会、全国選抜高校野球大会と変更された。

1-3 メディアイベントとしての高校野球

こうして始まった野球大会は、回を重ねるごとに参加校も増え、観客も増加していった。

メディアが記事・ニュースを作りだすために開催するイベントを「メディアイベント」と呼ぶ。川喜田（2012）は高校野球を「甲子園モデル」と呼び、成功の理由について以下のように述べている。

中等学校優勝野球大会の成功は、以下の要素が重なってもたらされたものと考えられる。①一高から始まった日本の野球は武士道野球として、日本人の精神に受け入れられやすかった。また郷土愛や選手・チーム、過去の歴史から紡がれる物語性がメディアによる増幅機能に合致した。②“体育振興”や“教育”の大義名分を掲げることに成功した。③電鉄会社の沿線価値向上戦略に適ったものであった。（川喜田，2012，p.19）

川喜田の挙げる「武士道野球精神」とは一体何か。それは、野球が日本に伝えられた際に強調された、日本ならではの野球観である。日本に野球が伝来した明治時代、私的な楽しみだけでは新たなスポーツである野球を正当化できず、野球普及の担い手だった大学生は、野球を娯楽ではなく武道ととらえた。「スポーツや娯楽として始まった野球を教育や武士道的野球道を強調することで、つまり精神と身体鍛錬としての野球の普及にその意義を転化させることで方向転換を正当化した」(川喜田, 2012) のである。

こうして「日本独特の野球イデオロギー」(有山, 1997) が生まれた。その特徴として、有山は次の3点を指摘する。①優勝劣敗の勝利至上主義。優れた者が勝ち、劣った者は負ける。朝日が大会ルール作成時に、トーナメント方式にしたのもこの精神があったからだと考えられる。②精神主義。体力や技術よりも文武両道や気力が求められる。③集団主義。個人の技量以上に集団の力を重要視。自らが犠牲となりチームの勝利を目指す。日本野球の犠牲の多さは、これを反映しているといわれ、特に高校野球では求められる。

大会の隆盛と共に報道も活発化した。その中で、さらに盛り上げる為に「大会の精神を具現化」(有山, 1997) した武士道精神を基にした美談が目立つようになる。

選手はチームのために病をおして出場し、敢闘する。敵味方チーム、観衆もともにその悲壮な精神力に感激し涙する美談である。こうした美談は、その後も繰り返し語られていくことになるのである。(有山, 1997, p.106)

大会を主催する朝日も武士道精神に目を付けた。規模が大きく持続的なイベントには、その存在意義のために社会的主題をもった物語が不可欠である。朝日は国民性に合致した日本独自の野球という物語を創造し、報じた。毎日もこれに追随する。

感情を直接伝えることが可能なラジオ放送の始まりが、これに輪をかける。有山(1997)はラジオ実況中継について「球場とは別の新たな興奮を作り出していくといったほうがよいかもしれない。(中略) ラジオの実況中継を聴くことは、球場に行って観戦することの代替ではなく、それ自体が独自の大きな楽しみであったのである。」という。

1954(昭和29)年、NHKのテレビ中継が始まった。杉本(1994)は「多くのテレビカメラを駆使してつくられる映像は、われわれを疑似体験の世界に引き込み、選手とアイデンティファイさせることによって、より感動的な状況を作り出す」と述べている。

メディアによって甲子園は「国民的行事」となり、大規模で永続的なイベントになった。そのメディアは美談として信頼や感謝、絆、努力などを物語るエピソードを報じ、その姿勢は現代まで続いている。

1-4 勝利至上主義とフェアプレー

有山は武士道精神の第一に勝利至上主義をあげた。優れているから勝ったのであり、勝利のために努力しなければならないという考え方だ。しかし、同時に高校野球には「負けた方も称賛する」「勝敗よりも大事なものがある」というスポーツマンシップ、フェアプレーを心がけるといふ姿勢がある。

こうした精神を提唱したのは、早稲田大学野球部初代部長安部磯雄だ（清水，1998）。当時、野球の早慶戦が勝敗に拘るあまり応援が過激化したため、1906（明治39）年秋から9年間に渡り中止となるような出来事があった。これに対し阿部は、「野球に対する熱が高まるほど観衆が紳士らしからざる態度を示すように見受けられる。その原因は、観衆が野球の技術より勝敗に重きを置いているからで、（中略）汚い野次は、愚行にすぎない」（清水，1998，P.159）と過激な応援と選手と観衆の両方にある勝敗にこだわる姿勢を批判した。

安部らの働きかけで復活した早慶戦は、勝利至上主義だけではなくフェアプレーを標榜する。この場合のフェアプレーは単に公正というだけではなく、品格などの意味を併せ含んでいる。選手のあり方について安部は「さっぱりしてわだかまりなく、のびのびとした人格をもつ者であること。全力を尽くして熱意や誠実さをもって事に当たるならば、成敗利鈍は問われず、ただその溢れでる自然な無邪気さの中に誠意のあることを願うものがスポーツマンの理想像」（清水，1998，P.161）と主張したという。これは、現在理想とされる高校球児像に当てはまる。

こうした野球観は全国に伝わり、選手は勝敗に拘ると同時にフェアプレーが求められることになった。学生野球憲章前文にも学生野球のあるべき姿として「試合を通じてフェアの精神を体得する事、幸運にもおごらず悲運にも屈せぬ明朗強靱な上位を涵養する事、いかなる艱難をもしのぎうる強健な身体を鍛錬する事」と記している。ここから「文武両道」「精神力」が求められていることがよく分かる。学生野球憲章は1950年に制定されたもので見直し論もある。が、現在も指針となっており、練習前に暗唱させる監督もいる。

1-5 観客・視聴者側からの甲子園

では、高校野球を観戦する側はどう考えているか。観戦者の意識について考察する。朝日は1988年、1998年、2003年、2008年、高校野球に関する世論調査を行った。同じ項目で質問を行っているので、時代ごとに比較をしてみる。2003年のものはスポーツ全般に関する世論調査で、他の調査とは若干形式が異なる。

① 高校野球に関心があるか（表①）

	関心がある	ない	その他・答えない	
1988年	67%	29%	4%	
1998年	65%	31%	4%	
2003年	67%（好き）	6%（嫌い）	24%（どちらでもない）	* 設問が異なる
2008年	60%	37%	3%	

② 高校野球の魅力はどんなところにあるか（選択肢くドラマチックな試合、ひたむきなプレー、郷土代表校の活躍、ヒーローの出現から一つ選ぶ＝択一）の上位（表②）

88年	1. 汗と涙のドラマ	2. ひたむきなプレー	3. 都道府県代表の対決
98年	1. ひたむきなプレー	2. 郷土代表校の活躍	3. ドラマチックな試合
03年	1. ひたむきなプレー	2. 汗と涙のドラマ	3. 都道府県代表の対決
08年	1. ひたむきなプレー	2. 郷土の代表校の活躍	3. ヒーローの出現

質問が若干異なるため正確なデータとはいえないが、60%が高校野球に「関心がある」と答え、その魅力には半数が「ひたむきなプレー」をあげた。世間のイメージを凡そ知ることができる。「ひたむきなプレー」とは一塁へのヘッドスライディングや投手の全力投球など挙げられる。選手のひたむきさ、一生懸命さは美談の最たるもので、そのイメージを人々が当たり前のものとし、求めている。

また観戦する人々は郷土代表校の活躍を強く期待している。郷土を懐かしむ心は誰もが持つ心情であり、地元に近い高校程思い入れは強くなる。田中は「郷土アイデンティティは自分が住んでいた土地を離れたときに、とくに強まる傾向があるように思われる」と指摘し、「甲子園出場校や甲子園球児は、都道府県の代表として郷土そのものを体現し、現代日本人の心情や心性（メンタリティ）を表現していることはこれまでも述べられている」（田中，1994，p.184）という。我々は球児たちの闘いに故郷を懐かしむ。朝日や毎日の拡販戦略として有効だった理由がここにある。

世論調査では高校野球の問題点について言及され、特に「他県からの選手集め」が非難されている。東北地方のある高校では、スターティングメンバーに一人も県内出身者がいないことから、素直に野球部を応援できないなどという意見もあった。

逆に言えば、高校野球が郷土アイデンティティに支えられている故の意見ともとれる。

2 高校野球の変容

2-1 勝利至上主義の変貌―「勝てばいい」と「フェアプレー」の間

2006年夏、駒大苫小牧田中と早稲田実業斎藤の投げ合いが大会を盛り上げた。3連覇がかかる駒大苫小牧と悲願の優勝を狙う早稲田実業（以下、早実と呼ぶ）。闘志をむき出しに投げる田中と、どんな時でもポーカフェイスの斎藤という2人の投手は「炎と水」とも例えられ、マー君ユウちゃん旋風が巻き起こった。

特に斎藤は汗をハンカチで丁寧拭く姿から「ハンカチ王子」と呼ばれ、更に丁寧なメディアへの対応が好感を呼び、その年のスターとなった。優勝インタビューで監督が「斎藤が目

立つが全員で頑張ってきたチーム」と言ったように、早実そのものに爽やかなイメージがあり、斉藤+チーム力とチームワークが報じられた。

しかし、スポーツライター小林は、その年の予選から早実の試合を見て「癖のあるフォーム、ラフなプレー、西東京の代表として、心から拍手で甲子園に送り出したいチームとは思えなかった」(2007, p.21)と語っている。

小林が見たのは西東京大会の決勝、日大三高との対戦だった。小林は、序盤から投手を惑わせるような打撃フォームの選手が多いと感じていた。更に終盤、早実の選手が通常なら足から滑り込むような状況にも関わらず滑り込まず、野手に体当たりをしたというのだ。会場は珍しいほどのラフプレーに驚き、一時、騒然となったという。しかし、新聞でそのラフプレーが報じられることはなかった。

早実は伝統のある野球部で、大物選手も多く輩出している。そうした歴史から高校野球の手本のように扱われ、ファンも多い。しかしその実態はラフプレーが多く、「勝ちさえすればいいのかと思われるようなものであった」と小林は指摘する。

だが、明治の野球創成期に唱えられた武士道精神に基づく「勝利至上主義」とは、勝ちさえすればいいというものではない。優れているものは勝ち、そうでないものは負けるという優勝劣敗の考え方だ。「試合の本義」は「勝つ」ことであり、「勝つ」ためにあらゆる努力苦心が集中される(中野, 1922, p.16)という、勝つため努力を尊ぶものであった。

だが、近年の勝利至上主義は、早実に対し小林が疑問を呈したようなものに変貌した。

高校野球には様々なプレッシャーが伴う。OB、父兄、卒業生、学校そのもの、勝てば勝つほど知名度が上がり応援も増えるが、同時に期待とプレッシャーがのしかかる。

小林は、早実の誤った勝利至上主義は、前年より成績が悪ければ弱くなったと糾弾するOBのプレッシャーのせいだと指摘している。勝利至上主義は結果を出さなければ認められない結果至上主義と言い換えることができるのだ。

しかし、一方で報道は勝つことが全てとは伝えない。勝ち負けよりも一生懸命やることや、試合までの道程が大切だとする。勝った方も負けた方も称え、勝敗よりも選手の成長を評価する。だが、それは大会で1敗もしなかった1校だけが優勝するという“結果”との間に乖離が生じる。優勝するためには、早実のようなラフプレーも反則でない限り作戦の一つとして必要だということと矛盾する。

この研究中に取材した東北地方のある高校の野球部の監督は、匿名を前提に「勝たなければならないが、汚い勝ち方は許されない」といったある種のジレンマに陥っていると答えた。また、勝ちに拘るあまり、選手一人一人の生活指導を疎かにしてしまう可能性があるという。また、プレーする選手自身も、勝つ為の手練手管を教えられながら、高校生らしい「正々堂々」「爽やか」なプレーを心掛けなければならないという矛盾に陥る。かつ「高校生らしさ」はひどく曖昧なのである。

2-2 現在のフェアプレー

1992年8月17日、夏の甲子園。二回戦、明德義塾(高知)対星稜(石川)の試合で、現在も語り継がれるある出来事が起きた。明德が、後に巨人に入団し、米・メジャーでも活躍した松井秀喜を全5打席敬遠したのだ。もちろんルール上何の問題もない。しかし、ランナーのいない場面でも徹底的に松井を歩かせる作戦は衝撃だった。試合中、観客からブーイングがおり、メガホンやビールの空き缶などがグラウンドに投げ込まれた。高野連会長も会見を開き「勝つことに走り過ぎている。度を越している。」と苦言を呈した。

経済新聞である日経すら社会面で「20球のボールを立て続けに投げたのは行き過ぎ」「正面から立ち向かっていく心意気が欲しかった。」と指摘(8月17日)。2日後にも「度を超す」境はどこに(8月19日)という見出しを掲げ試合について言及した。しかし、記事の内容はどちらかという明德を擁護し「まかり間違えば大量失点につながる危険な作戦を、“勇気をもって”選んだ」とした。

春の選抜大会主催社である毎日「(星稜に対して)気の毒」「(明德の馬淵監督の言葉に対して)これもまた、つらい言葉である」と、両チームに同情的な意見であった(8月17日)。「松井無念 5連続敬遠」と大きく見出しをつけたのは読売。更に「ファンに後味の悪さを残したゲームは、高校野球のあり方に一石を投じた。」と糾弾した(8月17日)。

大会主催社である朝日は明德を批判した。試合記事では見出しを大きく「星稜、「逃げ」に屈す」とし、「明德は勝ちを手にしたが、はたしてこの勝ち方で良かったかどうか?」「明德ベンチは、「勝利」にこだわるあまり、もう一つの大事なものを忘れていた、といたい」と痛烈だった(8月17日)。更に、翌18日の一面には論説として連続敬遠を取り上げ「明德義塾の戦法は、いささか極端に過ぎた」とした。その後も、連日のように投書欄で明德を批判するファンの声を紹介、高校野球のあり方を読者に投げかけた。

朝日の主張する「大事なもの」とは、安部がいう「全力を尽くして熱意や誠実さ」なのか。「単なる公正に留まらない品格も含んだフェアプレー」なのか。明德の作戦はルール上公正で、全く問題ない。だが、決して晴々しくも上品でもなく、卑怯ととれる逃げの行為だ。フェアではない。この試合は、高校野球におけるフェアプレーや高校生らしさについて考えさせられるものだった。

監督にも選手にも、どう教えたらいいのか、どうプレーしたらいいのか、迷いがある。

2-3 高校野球の特別性

高校野球はとにかく注目度が高い。他に全国大会の試合が全て全国放送される高校スポーツがあるだろうか。次の日、新聞の一面に選手の大きな写真が載る部活があるだろうか。世論調査でも、関心がある層が6割以上と注目度が高い。

注目度の高さから報道も、美談やスター主義など特徴的なものとなっている。選手は15～

18歳のただの高校生なのだが、有名な選手はまるでスターのように注目を浴びる。過剰な報道を問題視する声は、昔からある。朝日は1985年8月7日の社説で「選手をちやほやすことも反省したいと思う」と述べ、さらに「多額の寄付金が自分たちのために集まると思い、それが選手達を甘やかし、ひいては英雄主義、スター主義へとあおりたてはしないだろうか」と自省と警鐘を鳴らした。しかし、その後もダルビッシュ、斎藤祐樹などスター選手はもてはやされ、その年における高校野球の広告塔のような存在となっている。

高校野球の特別性は、報道だけでなく学校単位でも見受けられる。大概の高校は、強豪校でなくとも他の部活動に比べて硬式野球部の設備が整っている。それは野球部OBや卒業生による寄付金のおかげだ。先の社説では寄付金についても触れ、1984年、全国大会に出場した49校で14億6800万円の寄付金が集められたと報じた。多いところは1億円を超している。これほど巨額の金を使う高校スポーツは他にない

学外だけでなく、野球部は学校内でも特別視される。授業を休んでの全校応援など、野球以外では行われない。

一般の生徒は野球以外の運動部を純粋なクラブ活動として、また運動部員は自分たちと同じ生徒として、つまり仲間として見ているのだが、野球や野球部員に対しては少し違った見方をしている。野球部の活動は純粋なクラブ活動というよりは、それによって学校の名前が世間に知れるとか、応援に行ったり新聞記事を読むといったように娯楽的要素を提供してくれる存在としてとらえているところがある。とくに甲子園に出場経験がない学校では、一般の生徒の間で甲子園出場による知名度アップへの期待が高く、女子生徒の間で選手をアイドル視する、つまり、スペクテイター・スポーツとしてとらえる傾向がより多く認められた（田中、1994、p.191～192）

これを田中は「高校野球を取り巻く環境が、今日の高校野球をして愛校心確立の最も効果的な手段に祭り上げた」と指摘する。

3 高野連の処分の基準

3-1 不祥事の処分

不祥事の処分はどのように行われるのか。その過程について朝日（2008年8月5日）の調査がある。不祥事が発覚すると、加盟校は都道府県の高野連へ報告しなければならない。それを受けて都道府県の高野連は加盟校を調査し、日本高校野球連盟・審議委員会へ報告する。審議委員会は月1回を目途に審議が行う。書面で報告書が届き次第、処分を検討する。

明確な規定はなく、処分は類似事例と照らし合わせて決定されるという。審議委員会は、

処分の方針を決め日本学生野球協会審査室に上申する。通常、「高野連の処分」と呼ばれるのはこの決定だが、審議委員会には処分する権限はない。

正式な処分は、月に1回程度開催される日本学生野球協会の審査室の決定による。しかし、高野連の決定がそのまま反映されるため、実質的な処分の権限は高野連にあるといってもいいという。両者の役割は、簡単に例をあげると高野連が対外試合禁止と決め、日本学生野球連盟が具体的な日数（3ヶ月の対外試合禁止など）を決める。

加盟校	* 不祥事発生 → * 47都道府県高野連へ報告
都道府県高野連	* 加盟校を調査 → 審議委員会報告
高野連・審議委員会	高野連会長の諮問機関。現在16人で、委員長には学校長経験者が就くことが慣例。月1回をめぐりに都道府県高野連から報告があった不祥事案件を審議、日本学生野球協会審査室に上申する。処分する権限はない
日本学生野球協会・審査室	日本学生野球憲章の処分規定にそって審議する。審査員は6人以上9人以内。処分の種類は、重い順に除名、対外試合禁止、謹慎、警告

（表③）（朝日新聞、2008年10月1日朝刊、P.18）

処分の内容は、日本学生野球憲章第7章31条に定められた「除名」「対外試合禁止」「謹慎」「登録抹消・登録資格喪失」の4種類。その他、28条の「注意・嚴重注意」がある。

「除名」は処分対象者が監督など個人の場合に下され、学生野球資格がはく奪される。非常に重い処分だが、今までで除名の処分を受けた者はいない。「対外試合禁止」は、1か月、3か月、半年、1年と不祥事の内容によって期間が決められる。起点は事件が起きた日からになる。「謹慎」も処分対象者は個人。期間を定め野球部の活動に関わることを禁じられる。「登録抹消・登録資格喪失」は個人、団体に共に対象となり、高野連などの団体に登録しているものは登録を抹消し、未登録の場合、これから登録する資格をはく奪する。

「注意・嚴重注意」のうち「嚴重注意」は改善計画書を提出、高野連が必要な指導を行う。軽い処分であるが、嚴重注意を受けていながらも不祥事を重ねるとより重い処分に繋がる。

処分開始は不祥事件が起きた日を起点とする。「対外試合禁止」が決定した場合、何時を起点と判断するかでどの大会に出られなくなるか決まるため、発生日は重要である。

高野連は野球部員個人に対する処分は行わない。監督や部長など指導者に対しての処分は下すが、部員の犯罪が原因だとしても部員を退部にするといったことを判断せず、生徒個人への指導は学校側の判断で行われる。

3-2 「出場辞退」と「対外試合禁止」

次の表は、2000年以降の主な不祥事とその対応・処分をまとめたものである。高野連の処分に関してまとめると2つことが分かる。

1つは類似の事例を参考に高野連の裁量で処分案が作られる。そのため、必ずしも一定ではない。2つめは大会に出場しない（できない）という判断に関して、高野連の「対外試合禁止」と当該高校自らが下す「出場辞退」の2種類あることだ。「対外試合禁止」処分は公式なものであり、「出場辞退」は各高校独自の判断で、判断基準はバラバラと考えられる。が、結果として、大会へ出場できないことは変わらない。

主な高校野球不祥事とその対応・処分（表④）

発覚時期	高校名（出場回数）	不祥事の内容	発覚理由	学校の対応	高野連の処分
00 '3月	敦賀気比（福井） 春4回 夏5回	二年生部員が飲酒 無免許運転、追突 事故をおこした	事故	選抜大会出場辞退	警告処分
01 '6月	P L 学園（大阪） 春20回 夏17回	部内暴力、いじめ	元部員による 訴訟	部長、監督1年間の 謹慎	組み合わせ差し止め（＝ 夏大会出られず）6か月の 対外試合禁止
02 '5月	明豊（大分） 春2回 夏4回	野球部寮での部員 による暴行	被害者の病院搬送	・監督辞任 ・練習、試合自粛・加 害部員の無期謹慎	・夏の大会出場を認め ず・1年間対外試合禁 止・部長、監督1年間 の謹慎
05 '8月	明徳義塾（高知） 春14回 夏14回	3年、2年6人の野球 部員が1年部員に暴 力行爲、1、2年の 部員11人が喫煙	同校からの 報告	全国選手権大会出場辞 退	秋の公式戦出場の差し止 め
05 '8月	駒大苫小牧（北海 道）春2回夏7回	部長が部員に対し 暴力	同校に保護 者通報→同 校による報 告	部長の解任、校長20日 出勤停止	・指導者不祥事適用条例 がないため、処分なし
06 '3月	駒大苫小牧（北海 道）	卒業式の日、野球 部を含む14人が居 酒屋で飲酒、喫煙	別の客による 通報、補 導	・選 抜 大 会 辞 退・校 長、監督辞任	警告処分
06 '7月	文星芸大付（栃木） 春2回夏10回	1人の部員の傷害事 件	逮捕	高野連へ報告、謝罪	なし（他の部員に関与が ないため）
06 '8月	鳥取城北（鳥取） 春1回夏2回	7人の部員が、球場 内で盗み	1年 部 員 か らの報告	・監督、部長の謹慎・ 試合自粛、秋大会辞 退・盗みをはたらい た7人は退部	・有期の対外試合禁止
08 '7月	桐生第一（群馬） 春3回 夏9回	2年部員が強制わい せつ	逮捕	・部長辞任・後に、監 督も辞任	なし（他の部員に関与が ないため）
11 '8月	光星学院（青森） 春6回 夏6回	選手3人による飲酒	選手がプロ グに書き込 み→見た人 からの通報	・3人を停学処分・国 体辞退	厳重注意
11 '12月 ～現在	青森山田（青森） 春1回 夏10回	部内での死亡事件 （先輩部員から後輩 への暴行?）	死亡による 取材で詳細 が発覚	・選抜大会の出場選考 を辞退・春季県大会の 辞退	正式な刑事結果がでない ため、保留

矢口作成（出場回数は2012年夏 現在）

処分の決定は月一回開催される学生協会審査室で行われるため、不祥事発覚から時間がかかることになる。そのため、大会に出るか（出ることができるか）どうかの判断は、「出場辞退」→高野連の処分→学生野球協会の決定という順番になることが殆どである。その場合、先行する当該高校の「出場辞退」が後の高野連の処分に影響を与えるものだろうか。その点に注目しながら、次に「出場辞退」について考察する

「出場辞退」とは

高校野球における「出場辞退」は1980年代から頻繁に行われていた。「出場辞退」の事由について大会別にまとめものが、次の表である。どんな不祥事が発覚すれば、当該高校として「出場辞退」を判断するか、その傾向をみることができる。

表にまとめると夏の大会辞退が一番多かった。6月の報道が非常に多いため、注目が集まり夏の大会前に不祥事が発覚、そのまま大会辞退というケースが多いのだとも考えられる。この時期、告発やリークが多いという野球部監督や記者の証言もある。

以下は、これまでどういう理由で出場辞退が行われてきたかをまとめたのである。新聞記事となった1985年以降のを取り上げた。(かっこは年)

「出場辞退」の不祥事事由（表⑤）

春 地方大会	<ul style="list-style-type: none"> ・1年4人が2年11人に殴られけが(87) ・2年1人が2年に殴られけが(88) ・2,3年8人が1年8人に暴行、1人がせきつい打撲で入院(99) ・1年の4部員が部員でない1年3人に暴行(01) ・1年部員3人が中学生を恐喝し補導される(02) ・部員2人が1年1人をベルトや平手でたたく(06) ・寮内で上級生が下級生部員を暴行、死亡(11)
センバツ推薦	<ul style="list-style-type: none"> ・部長の売春あっせん(85) ・不法乗車、部長・部員の暴力など度重なる不祥事(01) ・2年部員が車盗み、補導される(02)
センバツ確定	<ul style="list-style-type: none"> ・その春卒業生によるけんか、相手は失明(87) ・部員12人に喫煙経験があったことがわかる(92)
夏の大会	<ul style="list-style-type: none"> ・部員が部員に殴られ急死(85) ・自転車2人乗りで死亡事故(86) ・部員1人が盗みで逮捕(86) ・2年6人が1年14人に暴力(88) ・2年1人が老人ホームで強盗傷害(88) ・部員が試験中担任に暴力(89) ・1年部員が無免許でミニバイクに乗り女性をはね大怪我をさせる(89) ・2年部員が中学女子更衣室に侵入、教頭に見つかりけがをさせる(89) ・監督が寮で部員にコップ一杯の酒をのませる、15人ほどが飲んだ(91) ・3年8人が2年25人に暴力(92) ・3年の部員1人が1年男子に暴力、けがをさせる(96) ・2年部員3人が2回にわたり1年13人に暴行(98) ・3年数人が2年数人に集団暴行(02) ・複数の部員が部室で喫煙(04) ・部員で集団いじめ(04) ・部員2人が服など万引き(04) ・部員の集団飲酒・喫煙(05) ・3年4人が2年3人を殴るなど、一人がほおを骨折、鼓膜破れる(11) ・上級生4人が1年5人に平手打ち、一人が鼓膜に穴が開く(11) ・上級生が1年全員を殴る(11)
秋 地方大会	<ul style="list-style-type: none"> ・3年3人が下級生1人に暴力(87) ・1～3年約30人が飲酒、喫煙(89) ・2年部員が1年35人全員の尻をバットで叩く(89) ・2年が1年に暴力(02) ・2年8人が万引き(11)

この一覧を見ると、まず夏の大会における辞退が多いことが目につく。次に内容として、

野球部内での“集団による暴力事件”が非常に多い。他にも、部内における“集団”による飲酒、喫煙など、集団で行った事由は辞退する傾向にある。また、部外でも、野球部部員が死亡事件や大けがを負わせる重大事件を起こすと、「出場辞退」する高校が多い。

出場辞退の判断には、「夏の大会」「集団」「重大事件」というキーワードが浮かんできた。

1986年、部員1人が起こした事件が原因で出場辞退した高校がある。それに対し高野連から「連帯責任にとらわれない考え方をした方がいいのではないか」とのコメントがあった。この頃から、死亡事件や大怪我をさせたなどの重大事件でなく、かつ該当者一人の単独での事件事故・不正であれば辞退せず、高野連の判断を待つ高校が増えてきた。

なぜ「出場辞退」するのか。

ここで、高校側がなぜ辞退するのかについて考えてみる。まず、出場辞退をすることによって処分が緩和されることへの期待が考えられる。

これに対し、2011年を例にあげて検証する。夏の甲子園予選を目前に控えた6、7月、奈良の天理、兵庫の滝川、栃木の足利工が部員の部内暴力で予選を辞退している。3年生最後の夏を諦めるという重い決断をしたにも関わらず、各校にそれぞれ1～2ヶ月の対外試合禁止処分が言い渡された。

筆者（矢口）の質問に対し高野連からの回答がなかった為推論であるが、対応と処分を調べた限りでは両者に関係性はなく、出場辞退があったからといって高野連から同等の対外試合禁止の判断が出るとも、逆に軽くなるともいえないようである。つまり学校側の出場辞退によって、高野連の処分は左右されないといえる。

では、高校側はなぜ出場辞退するのだろうか？ その理由は、報道の早期終息を図ろうとする学校の不祥事に対応する広報戦略ではないかと考えられる。

不祥事報道が長期化することによるデメリットはいうまでもない。企業不祥事を例にとれば、幾つものメディアの報道により世論が沸騰するとついには社会問題になる。それは例えば商品のボイコットとなって現れる。近年は、小売店・スーパーが早々に商品を撤収する傾向があり、当該企業の業績を直撃する。業績悪化に加えレピュテーション（評判）が低下すると、ブランド価値が失われる。優秀な従業員が続々と退職したり、あるいは採用が困難になったりし、部門が存続できなくなるケースもある。不祥事は取引先の離反も招く。「あんな企業と取引している」と自社のレピュテーションを傷つけることになるからである。取引中止や商品・材料の引きあげ、提携見直しなどが行われると、企業活動自体が困難になる（村上、2010、P.29,30）。連日、報道されることによって企業に与えるダメージは限りなく大きい。危機管理広報において、対応は何より報道の早期終息を重要と考える。

これは、高校においても同様のことが言える。フェアプレーの精神に鍛えられた野球部の

マイナスイメージ。それは強豪校ほど大きなダメージとなる。私立高であれば、受験生・両親の反発を招き、受験者減を招き、学校経営を直撃する。公立高校であっても学校の評判が悪くなり、生徒の就職、進学にマイナスの働きかけをすることになる。高野連の処分を待ち報道を長期化するより自らの手で決着をつけ終息させた方が高校のためになると、経営陣がそう判断しても不思議はない。

記者たちは、企業不祥事において、社長や経営陣の辞任を合戦になぞらえ「クビをとる」ということがある。筆者（村上）の聞き取り調査に対し、テレビ・新聞の記者たちはクビをとることで、「これでケジメがついたという世論の満足感。これをもって報道の仕舞いを感じる」と証言している（村上、2010）。企業不祥事では最高責任者が自ら最も重い責任の取り方“辞任”を選ぶことによって報道及び世論の幕引きを狙うように、高校野球においては選手たちがそれまでの努力と汗を全て放棄する「出場辞退」という重い責任の取り方をすることで“ケジメ”を印象付け、報道の早期終息を図るのである。

3-3 連帯責任

高校野球の不祥事に対する責任の取り方に「連帯責任」がある。高校野球の不祥事対応において、連帯責任の持つ意義は大きい。

大辞泉によれば連帯責任とは「複数のものが連帯で負担する責任」と説明される。連帯責任の例として、江戸時代の五人組が挙げられる。5軒一組とし禁教のキリスト教徒がいたり、犯罪を行う者が出た場合、組中全員を罰することで相互監視させる仕組みだ。

学生野球憲章の第2条「学生野球の基本原則」には、「学生野球は、友情、連帯、そしてフェアプレーの精神を理念とする」と“連帯”の文字が見られる。これにより、過去、学生野球において連帯責任が重要だとされてきた。しかし、その連帯責任に対する考え方は、変化している。具体的な事例で検証する。

1954年、ある高校の応援団が試合中に乱闘をおこした件では県全体の試合が2か月中止となった。連帯責任を県単位に課した厳しい処置である。さすがに県単位の連帯責任の取り方はその後なくなるが、1970年代後半まで、野球部以外の同じ学校の生徒や教師が事件を起こしても、高野連の処分の対象となった。この頃、大会を辞退する高校も多い。特に招待大会である選抜大会は、不祥事の対象となった時点で、出場の道が閉ざされた（朝日、2007）。これに対し高野連は「やむを得ない」「やはり辞退すべき」と肯定していた。

当時、その判断を主導していたのは、第3代高野連会長の佐伯辰夫（1967年～1980年会長職）。1981年野球殿堂入りし、殿堂に掲示された佐伯のプレートによれば、佐伯は早大野球部出身。戦後、高野連の前身全国中学校野球連盟設立に尽力し、それまで新聞社の主催だった大会を連盟との共催とした高校野球中興の祖。全国高校野球連盟第3代会長として、高校野球を「教育の一環」と位置付け、「高校野球はプロ養成機関ではなく、人間形成の場」としてアマチュアリズムを謳いあげ今日の発展隆盛に導いた。

中村（2013）は、当時の連帯責任の厳しさを、日本高校野球連盟参事田名部和裕の言葉を引用し「昭和40年代は消しゴム1個盗んでも1年間出場停止だった」と表現する。佐伯が会長をしていた時期、「今では考えられないことだが、補欠部員がタバコを吸っただけでも、同じ高校の一般生徒がケンカしただけでも、すわ出場辞退かという時代だった」。

1979～1983年、連帯責任のくくりが野球部単位へと縮小する。それは、佐伯の後を継いだ第4代高野連会長牧野直隆が不祥事に関する連帯責任について寛大だったことによる（中村，2013）。

牧野は、1981年、佐伯の死去を受けて会長に就任した。牧野によって処分は軽くなり、野球部以外の生徒の事件で野球部が大会に出場できなくなるようなことはなくなった。しかし、基準を急に緩和するわけにはいかず、徐々に緩和していった。その為1984～1999年、処分の甘いものと厳しいものが混在する曖昧期となる。92年の早良高校の暴力事件は対外試合を禁止し、夏の大会への出場を禁じたが、ほぼ同時期に起った鹿児島実業の暴力事件ではすぐに正式な処分が出ないためとりあえず参加にしておく、など差が見られる。また、88年には千葉工商の対外試合禁止処分を3ヶ月繰り上げて夏の大会に出られるようにしたことなど、変容の象徴といえる。

2000年以降、暴力に対して厳しい処分が下る一方、連帯責任の範囲はどんどん小さくなっている。高野連として大きな方向転換になると言われたのが、2008年6月の龍谷大平安野球部への対応だ。2年生による部内暴力が発覚したが、3年生は関与がなかったため、夏の京都大会には3年生だけで参加させた（毎日，2008）。対応を学年によって分けた例は過去にないが、「最後の夏」を思いやった結果となっている。

近年、出場停止処分が問うるのは部全体の体質である。2009年の福知山成美でも加害部員がいる学年をのぞいた選手のみが出場が認められた。2012年にも規制緩和の分かりやすい例がある。7月に広島工業、8月に作新学院と、夏の全国大会に出場が決まった高校の部員による不祥事が2件も続いた。しかし両校は辞退せず判断を高野連に任せ、両校とも大会出場が認められた。

高野連が問う「連帯責任」は、その枠組みが県→学校→野球部→部員の学年と緩和していったことがわかる。さらに人数も重要で、1人が部外で事件を起こしたとしても最近では重い処分の対象とはならない場合が多い。2008年には高野連審議委員長の西岡宏堂が「連帯責任目安は5人」と発言している（朝日，2007）。処分期間も、例えば部内暴力で下級生が被害者なら新チーム後は試合に出られるよう考えるという。

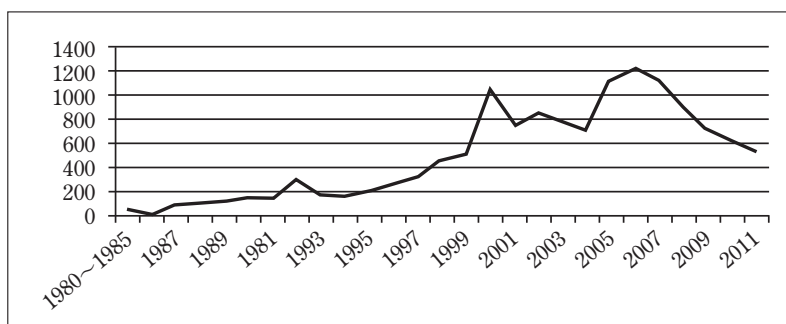
大事なのは「誰かがやめろ、といえる雰囲気学部にあるかどうか」というのが高野連の考えだ。一人の処分者も出さない。それがチームワークをうたう野球本来の姿である。（朝日 2007年12月8日）

4 高校野球の不祥事報道

4-1 高校野球不祥事の報道推移

まず、高校野球の不祥事がどれだけ報じられているか分析を行った。分析対象は朝日、読売、毎日、産経、日経の全国紙5紙。「高校野球」と「不祥事」、「高校野球」と「出場辞退」、「高校野球」と「事件」と不祥事に関連する電子記事データベースを利用した。新聞を素材に選んだのは入手が比較的容易であり、長期に渡って報道内容を追うことができるほぼ唯一のメディア媒体であることが理由である。

高校野球の不祥事記事件数（表⑥）



グラフを見ると、1990年代後半、報道量が増えていることが分かる。急増した2000年、「岡山バット事件」が起こった。この事件は岡山県の公立高校野球部員の少年が練習中に部員4人をバットで殴り逃走、その後、自宅で母親をバットで殴打し殺害した事件。少年が16日間逃走を続けたため報道も長期化した。少年の在籍した高校は夏の県大会出場を辞退した。さらに同年3月、選抜大会に出場が決まっていた敦賀気比高校（福井）で一人の部員の不祥事（無免許運転、飲酒運転）により出場を辞退している。

2005年は、強豪校や大会優勝校などの高校が不祥事が相次いだ。2005年、明德義塾（高知）が、野球部員の喫煙、いじめ、暴力を理由に、夏の大会2日前、出場を辞退した。8月末、夏2連覇の駒大苫小牧の不祥事が発覚。この2件は、学校の隠ぺい工作についても問われた。2007年は、春、授業料免除などの特典を与えられた野球特待生の存在が問題となった。さらに大会出場に有利な高校へ県境を越えて進学する「野球留学」も裏表の関係として問題になる。その後、高野連の調査で全国377校、7920人の特待生の存在が明らかになった。この問題は論争を呼び、報道も多くなった。

4-2 高校野球の不祥事報道の特徴

本節では、先に挙げた「主な高校野球不祥事とその対応・処分」（表④）の11事例につい

てパターン分析を行った。不祥事報道のパターンについては、著者（村上，2010）が不祥事150事例を分析し、下記の5つに分類している。

①早期終結の【「坂道」パターン】

発覚時をピークに報道件数が減っていく。不祥事報道の大多数がこれに分類される。

②【「富士山」パターン】

不祥事発覚から少し日数が経ってから報道件数のピークが起こる。不祥事の発覚が調査や事故などで始まり、新たな事実が発覚した際に報道が過熱化する例に多い。

③【「双子のピーク」パターン】

第一のピークとそれと同等かそれ以上の報道量の第二のピークがあるのが特徴。第一報より大きい隠べいの事実が明らかになった際、このパターンになる。

④【活発な報道がしばらく続く「台地型」パターン】

大規模な事件・事故で次々と新たな事実が明らかになり、小刻みな同数程度の報道が続くパターンである。

⑤【小刻みな山が続く「山脈」パターン】

台地パターンと似ているが、多くがスクープから始まりそれを追うように新たなスクープが報じられ、やがて糾弾キャンペーンへと変わっていくのが特徴である。

これらのパターンを手がかりに、具体的な事例研究を行う。分析に当たっては朝日新聞の電子データベース「聞蔵Ⅱ」を利用した。理由は、朝日が全国紙の中で最も高校野球に関する報道が多いことによる。

（i）2005年8月明德義塾（高知）、部員による部内での暴力行為、喫煙など

8月4日、高知県大会で優勝し全国出場が決まっていた明德義塾から高野連に対し出場辞退の届け出が届いた。2年、3年生6人の野球部員が1年生部員に暴力行為をしていたことが分かったほか、1,2年生の部員計11人が喫煙していたことが判明したからだ。

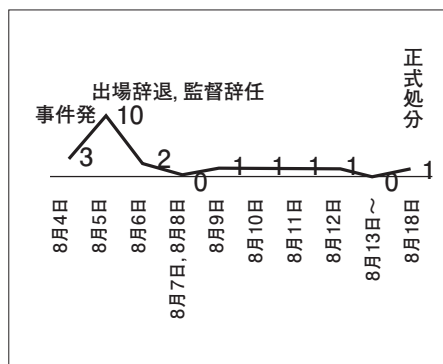
代表校が不祥事で出場辞退するのは1939年の帝京商以来のこと。大会規定によって、決勝で敗れた高知高校が全国大会に出場した。監督と部長は辞任。17日に高野連は明德義塾に対し秋季大会の出場停止という処分を下した。

問題は、暴力行為と喫煙より、同校が大会前からその事実を知っていたにも関わらず、高野連に報告していなかったことだった。4日付の朝日夕刊は、明德の馬淵史郎監督の喫煙については「グラウンド周辺の掃除をさせ、野球部として処分することで収めようと思った」。暴力行為は「部員の実家への謝罪で、理解を得られたと思った」と語ったことを弁明と断じて掲載した。報道は部の隠べい体質を非難した。監督らの行為を「教育者としての自覚が疑われる」、全国から選手を集める野球留学によって「勝ちさえすればいいという考えに陥り

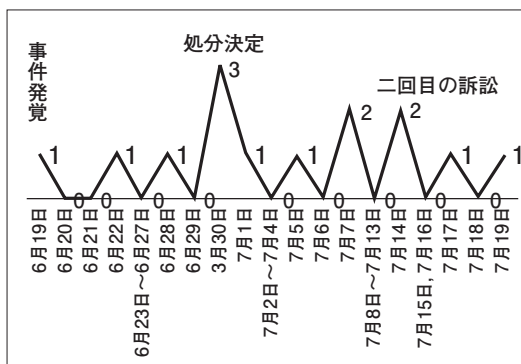
やすい高校」に疑問を投げかけている。

明德は、事件発覚と同時に出場辞退を申し出ている。高野連による処分を待つ前に、学校側から決着をつけたと言い換えてもいいだろう。よって、報道はすぐに終息する「坂道パターン」となった。

05' 明德義塾 (表⑦)



01' PL学園 (表⑧)



(ii) 2001年6月 PL学園 (大阪)、上級生からのいじめ

不祥事が発覚したのは6月19日。大阪の強豪校PL学園で、野球部に所属していた元部員が上級生からのいじめにより学校を辞めざるを得なくなったとして、先輩部員と高校、監督を相手に慰謝料を求めたことで明るみに出た。強豪校の栄光に隠れたいじめとも呼べる暴力による上下関係が明らかになった。高野連はこの事態を重く受け止め、PL学園に対し6カ月の対外試合禁止を決定。処分報道は終結するかのように思えたが、14日に別の元野球部員がPL学園を相手に訴訟をおこした為、報道が更に長期化した。報道は、事件発覚と新たな訴訟で山が続く「山脈パターン」。だが1度目のピークに比べると2度目のピークはそれほど注目されなかった。すでに卒業した生徒だった為、拡大しなかった。

(iii) 2005年8月 駒大苫小牧 (南北海道)、部長による部員への暴力

2005年8月20日、駒大苫小牧高校は57年ぶり6校目の二連覇を達成した。その熱狂も覚めやらぬ23日、同校は野球部部長が部員に暴力をふるったとして無期限の謹慎処分にしたと発表した。暴力が行われたのは大会前で、校長にも保護者から通報があった。校長は直ぐにでも高野連に報告しようと考えたというが、「大会後に処分してほしい」という保護者の申し出を尊重したとして、報告は23日以降となった。優勝取り消しかと噂されたが、選手の関与はないため優勝は取り消されず、秋季大会への参加も認められた。

本件では、高野連に指導者の不祥事に対する明確な取り決めがないことや処分を恐れて不祥事を隠ぺいしようとする学校の姿勢が問題とされた。これを受け規則改正が行われ、責任の範囲は「学校に在籍している校長、教頭、または教諭」、指導者の行為で勝利を取り消す

のはサイン盗みなどの試合での不正のみ、と定められた。

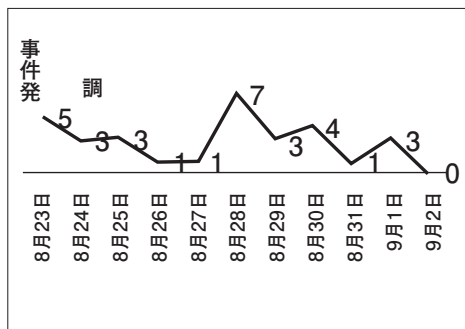
(iv) 2006年3月 駒大苫小牧（南北海道）、引退した3年生による飲酒

2006年3月、また駒大苫小牧で不祥事がおきた。卒業式があった1日の夜、野球部10人、バスケットボール部4人の3年生ばかり計14人が、市内の居酒屋で飲酒や喫煙をして警察に補導されたのだ。高野連は04年から「卒業日まで部員登録を継続する」としている。つまり3年生部員は引退していても、3月31日まで野球部に籍があるということだ。同校は夏の不祥事から立て直し、選抜大会への出場が決まっていた。しかし夏の不祥事とこの不祥事が重なったことで辞退を発表。監督と部長がそれぞれ役職を辞任、校長も辞表を提出した。が、高野連の処分は一番軽い警告処分だった。

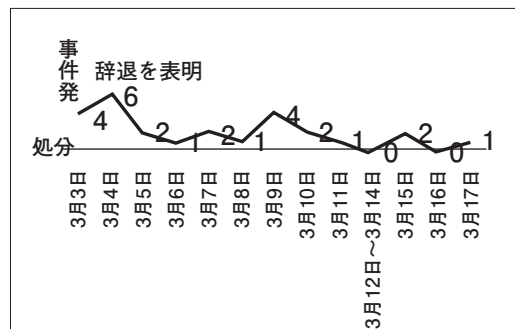
報道もほぼOBといってもいい3年生の不祥事であったため「関係のない1, 2年生が責任を負うことになりかわいそう」というものが多く見られた。3年生の自覚や緊張感のなさを批判し、指導する親や教育者を責めるものも多かった。

04年までは処分の対象とならなかった3年生部員が不祥事をおこしたということで、辞退という申し出には「厳しすぎる」という声もあがった。現役選手には罪はない。しかし、度重なる不祥事にけじめをつけるためにも、自らの重い処罰が必要だったのかもしれない。3年生部員は、後輩に謝罪する会合で涙ぐみながら頭をさげたという。

05' 8月駒大苫小牧 (表⑨)



06' 3月駒大苫小牧 (表⑩)



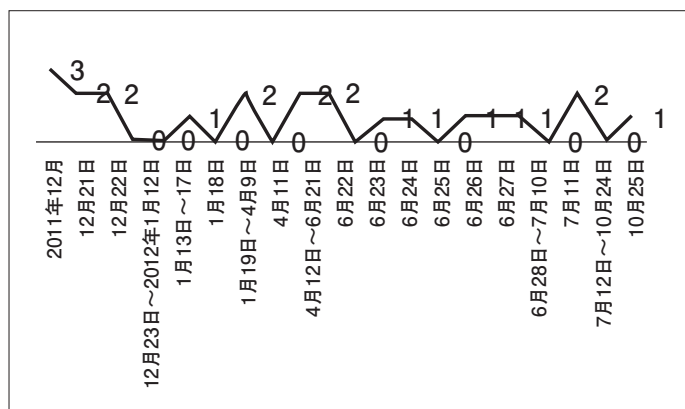
(v) 2011年12月～2012年現在 青森山田（青森）部員による暴力、死亡事件

2011年12月、青森山田高校で部員の死亡事件があった。18日深夜、野球部寮で1年生野球部員の容態が急変して意識不明となり、19日未明に死亡が確認された。当日夜、この部員が1年生部員3人と寮内で禁止されている焼肉をしていたところを2年生部員が見つke、注意したという。その際、部員の背中を拳で叩いたところ容体が急変。連絡を受けたコーチが119番通報したが、間に合わなかった。同校は選抜大会の出場校選考を受けていたが、20日に推薦辞退を申し出た。2012年1月、県警は2年生部員を暴行の疑いで青森地検に書類送検。しかし、司法解剖からは暴行と死亡との因果関係の特定にいたらなかった。

4月9日、遺族が学校法人・青森山田学園と先輩部員、その両親を相手に、損害賠償を求める訴訟を大阪地裁におこした。両親は、男子生徒は暴行で胸に強い衝撃を受け心臓が止まって死亡したと主張。以前から下級生に行き過ぎた指導をしていた先輩部員の指導監督を怠り、事故時に救命措置も行わなかったとして、学校側の過失も訴えた。学校側は「日常的な暴行があるとは承知していない」などとして、争う姿勢を示し、請求の棄却を求めた。新聞報道は事実のみを報道しており、事件に対して意見を述べていない。

報道が長期に渡る「台地型」パターンだ。報道期間が長いのは、遺族が学校側と加害者に対し訴訟をおこしたからである。現在に至るまで決着はついておらず、高野連による処分も決定していない。部員の死亡理由が明確でなく学校が最終報告書を高野連に提出できないからだ。死亡理由不明のままで、2012年夏、青森山田は甲子園へ出場した。

11' 12' 青森山田 (表⑪)



高校野球の不祥事報道の特徴

以上の5事例のパターン分析を始め全11事例のパターン分析から、高校野球は不祥事発覚をピークに報道件数が減少する「坂道」パターン（7事例）と、処分によって不祥事報道が収束する「富士山」パターン（3事例）が多いことがわかった。報道が数カ月渡る「山脈パターン」「双子のピーク」は少なく、活発な報道が長引く台地型は1例しか見られない。

その理由として、「出場辞退」又は「出場禁止」という決定が非常に厳しいということが挙げられる。頑張ってきた選手たちが試合に出場できないことは、最も辛い罰である。選手たちをそれ以上追い詰めるようなことはできないと記者たちが判断すること。また、少年であるため実名報道ができず、それ以上報じきれないということも要因と考えられる。

4-3 企業不祥事からの考察

先の分析で対応が早いほど報道が早期終結するという傾向が明らかになった。これは、企

業不祥事の報道でも同じであり、社長の辞任など世間が「責任をとった」と認めれば報道が終結する。高校野球ではそれは高校独自の判断で行う「出場辞退」である。

素早い「出場辞退」にも関わらず青森山田の報道が長期化したのは、裁判の長期化と事件の決着がつかないままに夏の甲子園に出場したからだ。

次に、駒大苫小牧のように隠べいが報道を長引かせる。平野（2010）は、不祥事報道の拡大は「影響の大きさ」、「組織関与の度合い」に加え、発覚後の「情報開示プロセス上の巧拙」の因数分解だと説明した。記者たちも「隠べい」を嫌う。筆者（村上）は、記者への聞き取り調査から「隠べい」が報道を拡大させることを明らかにした。記者はそこから「責任逃れ」「無責任」を感じ、「不誠実」を感じ、さらに「被害者が大変なことになる」と考えるからだ（村上, 2008, p.250）。

高野連もすぐに報告をするよう求め、隠べいを行った高校には事件に対する処分にプラスして報告を怠った部長に対し謹慎処分を下している。暴力や喫煙をすぐ報告しなかった2005年の明德義塾は、高野連から「報告しなかった責任は重い」「連帯責任はやむをえない」と批判をうけている。

5 結論

これまで4章にわたり、高校野球の不祥事とその報道について考察してきた。本章では、結論としてこれまでの考察をまとめる。

まず、高野連による処分「対外試合禁止」と高校側からの「出場辞退」は、選手にとって試合に出場できない点では同様であるが、全く異なるものであった。

高野連の「出場停止」など“処分”は、日本学生野球憲章と過去の処分例に基づき下されている。一方、「出場辞退」は当該高校自らの判断で、その基準は高校によって異なる。事実、辞退を選ぶ高校と選ばない高校がある。

高野連の処分は、実質高野連の裁量であり、運用は大きく変わってきた。特に、教育の一環として「連帯責任」を問う範囲について変化した。かつて同じ高校の生徒が起こしたというだけで連帯責任の対象となっていたものが、現在、部員でかつ同じ学年とまで狭まり、人数も5人が目安、以下は問わない方向にある。「連帯責任」を問うため、処分も実行者が集団であるかどうかで大きく変わってくる。

また、出場辞退に対する高校の判断は、企業不祥事への対応で説明できる。出場辞退の狙いは、これによって報道を早期終結させ当該高校のレピテーションを守ることにある。そのため高野連からの処分を待たずに辞退するケースが多い。が、大会に出場する方がよりメリットがあると判断する場合、処分を待つとして辞退しないケースも登場している。

当初、仮説において罰則規定がなく処分は高野連の裁量によるため類似の不祥事でありな

から差があるとしたものは、その通りであるが、前述のように①時代の違いにより運用する高野連の考え方の変化。②出場辞退においては、当該高校の判断。から、類似の事例でも結果に違いが生じるのである。

他の高校スポーツはどうだろうか。実は、不祥事に対し野球部以外のスポーツは上部団体からの厳しい処分などない。統括している日本高体連が処分を下さないためだ。他のスポーツが甘いのではない。野球が特別に厳しいのだ。

駒大苫小牧3年部員の飲酒・喫煙の場合、その場にいたのは野球部員だけでない。バスケットボール部員もいた。しかし、バスケットボール部に対する処分ははっきりしない。処分はなかったのかもしれないし、少なくとも報道されていない。そうしてこの件は、「野球部とバスケットボール部の不祥事」ではなく「野球部の不祥事」として報道された。

なぜこうしたことが起こるのか。それに対し、高校野球がその始まりにおいて、新聞社の販促イベントというメディアイベントであること。教育の一環とされたことで発展したことを解明した。教育の一環として掲げられた「武士道精神」は「勝利至上主義」「精神主義」「集団主義」として日本人全体の血肉となっていくた。

だが、その後、「勝利至上主義」は本来の意味を離れ“勝ちさえすればいい”と変容、「集団主義」は行き過ぎた連帯責任を課してきた。「精神主義」は単なるフェアプレーを求めるのではなく、品性、爽やかさを求めるものとなった。選手たちは勝利を求められながら品性を求められ、まるで相互監視のように連帯責任を求められる。

ルールを超える暗黙の規範、それが、高校野球において“不祥事”という違法ではない不正が糾弾されるカテゴリーを誕生させたのである。

今後の研究について

はじめにでのべたように不祥事報道の研究は、主に企業を対象に行われてきた。しかし、スポーツの社会的影響力が高まるにつれ、体罰、セクハラなど様々な不祥事が発覚し報道されて社会問題となっている。だが、スポーツ報道において、不祥事報道の研究は殆どされていない。本稿はその入り口に立つものである。報道研究である以上、報道された文脈、内容分析、あるいはニューバリュー、受け手の受容などの様々なアプローチが必要である。本稿を書くに当たっても内容分析、ニュースバリュー研究などを並行して行ったが、スポーツ報道は感情論的な部分が多く充分なデータが蓄積できず、紙面の関係もありカットした。今後、スポーツにおける不祥事報道の研究を進めるにあたっての課題としたい。

注釈

- 1 日本高野連の西岡宏堂・審議委員長は「本来なら1カ月のものも3カ月となるなど、時代の流れの中で処分が重くなっている。会議ではさらに重い処分を求める意見もあった」と話した。(毎日,2013年5月13日)
- 2 「国民が等しく教育を受ける権利をもつことは憲法が保障するところであり、学生野球は、この権利を実現すべき学校教育の一環として位置づけられる。この意味で、学生野球は経済的な対価を求めず、心と身体を鍛える場である。学生野球は、各校がそれぞれの教育理念に立つて行う教育活動の一環として展開されることを基礎として、他校との試合や大会への参加等の交流を通じて、一層普遍的な教育的意味をもつものとなる。学生野球は、地域的組織および全国規模の組織を結成して、このような交流の枠組みを作り上げてきた。」(高野連「日本学生野球憲章」)

参考文献

- 有山輝雄 (1997)『甲子園野球と日本人 メディアのつくったイベント』吉川弘文館
- 石井慎二 編 (1989)『別冊宝島'98 高校野球の真実』JICC出版局
- 加藤尚武編 (2007)『応用倫理学事典』丸善
- 軍司貞則 (2008)『高校野球「裏」ビジネス』ちくま新書
- 清水論 (1998)『甲子園野球のアルケオロジースポーツの「物語」・メディア・身体文化一』信評論
- 杉本厚夫 (1994)「劇場としての甲子園—高校生らしさの現実—」『高校野球の社会学 甲子園を読む』世界思想社
- 久保田高信 (1956)『高校野球五十年』時事通信社
- 小林信也 (2007)『高校野球が危ない!』草思社
- 田中励子 (1994)「甲子園と郷土アイデンティティ」『高校野球の社会学 甲子園を読む』世界思想社
- 村上信夫、吉崎誠二 (2008)『企業不祥事が止まらない理由』芙蓉書房出版
- 村上信夫 (2010)『会社をつぶす経営者の一言 「失言」考現学』中公新書ラクレ
- 森田浩之 (2009)『メディアスポーツ解体』NHK出版
- 駒橋恵子 (2007)「企業事件は10年前の2倍以上に」『危機管理と広報は表裏一体である』NTTアド
- 中村計「【最強とは——興南にみる沖縄高校野球の真実 (16)】佐伯天皇」WEBROBZA, 朝日新聞、2013年5月13日
- 村上信夫 (2010)「不祥事報道拡大のパターン研究—150事例分析と歴史的考察から」『応用社会学研究—No52—』
- 川喜田尚 (2012)「メディアとスポーツの共栄についての研究—放送黎明期のメディア戦略と甲子園モデル形成の背景—」『立教大学大学院社会学研究科年報—第19号—』
- 「高野連「未報告、責任重い」明徳義塾、甲子園辞退」朝日新聞2005年8月4日付夕刊
- 「明徳義塾“松井封じ”」日本経済新聞1992年8月17日付夕刊
- 「「度を越す」境はどこに」日本経済新聞1992年8月19日付朝刊
- 「松井5敬遠 明徳の策に星稜沈む」毎日新聞1992年8月17日付夕刊
- 「松井無念 5連続敬遠」読売新聞1992年8月17日付夕刊
- 「星稜、「逃げ」に屈す」朝日新聞1992年8月17日付夕刊
- 「連続四球 (窓・論説委員室から)」朝日新聞1992年8月18日付夕刊
- 「甲子園の夏はふだん着で」朝日新聞1985年8月7日付朝刊

「選抜高校野球、東海大浦安が辞退代わりに常総学院」朝日新聞1987年3月20日付朝刊

「高校野球のかたち」朝日新聞2007年12月2日～2008年11月27日

「高校野球世論調査」朝日新聞1988年7月13日付朝刊

朝日新聞1998年6月3日付朝刊

朝日新聞2003年10月7日付朝刊

「ゆがんだ野球部再生へ向けて」朝日新聞2001年7月10日付朝刊

「高校野球不祥事、過去最多の960件 05年度」朝日新聞2006年5月26日付朝刊

「高校野球 原点を考える」朝日新聞2008年8月5日付朝刊

「大会中に部員逮捕 作新出場」日刊スポーツ2012年8月19日

「龍谷大付属平安高校野球部で不祥事。3年生だけで京都大会出場へ」毎日新聞2008年6月25日朝刊

「公益財団法人 日本高等学校野球連盟」<http://www.jhbf.or.jp/>

「日本学生野球憲章」<http://www.jhbf.or.jp/rule/charter/index.html>

「公益財団法人 日本学生野球協会」<http://www.student-baseball.or.jp/>

「長崎県高等学校野球連盟」<http://www.n-kouyaren.sakura.ne.jp/>

以上 2011年11月11日取得

毎日新聞 2013年5月11日<http://sp.mainichi.jp/m/f/koshien/news.html?cid=20130511ddn035050072000c2>

2013年05月11日取得

平野日出木 「不祥事が報道される基準とは？」『経済広報』（2010年8月号）掲載

http://www.kkc.or.jp/plaza/magazine/201008_26.html?cid=4 2013年5月20日取得

宮本 陽祐・渡辺 俊「高校野球出場校の変遷に関する空間分析」筑波大学データバンクプロジェクト

<http://infoshako.sk.tsukuba.ac.jp/~databank/thesis/2006/a2006swatanabe.pdf> 2013年5月13日取得